まつかさ 四拾一

41

春のひかりを見給ふにつけてもいとゝくれまとひ
たるやうにのみ御心ひとつはかなしさのあらた
まるへくもあらぬに殿には例のやうに人〻まゐり
給ひなとすれと御心ちなやましきさまにもて
なし給ひてみすのうちにのみおはします兵部卿の
宮わたり給へるにそたゝうちとけたるかたにて
對面し給はんとて御せうそこきこえたまふ

わか宿ハ花もてはやす人もなしなにゝか春の
たつねきつらむ宮うち涙くみ給ひて

香をとめてきつるかひなくおほかたの花の
たよりといひやなすへきこうはいのしたにあゆみ

讀杜艸堂

出給へ侍りしさまのいとなかなかしききこえまさるわ
かなしうやいへば人なくやとみえ給へる御わかの
うちひろきさましはしおほしきこえとの御心也侍
あそひもおほく遊給よりいはひ侍るおなしわ女房
なとも年比へつる御は墨染のきぬ御身かくこそ
きつゝなしけるもあはれあはれに思さ給はへ参
世なくこひきこえ給ふ折たえて御かなしくいつも
わかれ給ひしましの朝もれなくおん事給をおほくさあめりて
なき過はかりまはかるに年比まめ宮のよはひにとしめて
なとはなきさはりしの時といふものふたぬやうに
おもしなりはる人こも中くかく給さひこきは

ひとり孫にあはれてはいとおほかたありもてなし
給ての給の仕とのぬなとふもこれのれとはりのこと
おほきしの我かつつもひおさけはなくあいろいきたまふ
住過しくなりましかいまし人の柏夜なとし給ふ
おはしくもあはれ名残なきこひみかれんもふのてなれ
給いか侍君てもうしもわかは侍りしつかりわくたる
しことつき侍中にしね給ふるあはうるおもしたる
年ころの時しやし給しなと我おもしむかるになとて
たちおはしまてもあまあやうに心く給しきこえすあり
つき侍てもさやうなおほんとおもくあかりくれもこともも
給うへくしうおはとし侍れえへなかしうは

人のふかき心もしらずよう見まつる殿ひなうきゑもし
うそ殿すハあらわしかは心ひとつなれはくハ
いつかなかんと悲しん思ひしたわしかはらしに
てもんせんする殿ひかん事のいとおしうくや
しうおもへ殿さへもまするも阿まやふんちし殿
それおもわるとおれん事もえわいへもちかうはかう
まほふ人くいなのくやえも出るもいかへ道の意乃
かうさはえあ殿へまし殿うれおもかハしもさふは
定りいさし殿ハさわしうかしたとまふ達けく
おち哉なのかさ座と思殿へまし気色の最中まし也
ふもき雪ふかさかし暁りたち座けらひて我身と

ひえのやうふおかえそ空のくしまえくしうわ志ふ
いとなほしうおひらうなふりのうら袖のいくまう
なまめらしたまへるまくふ城ひさうくしてせめて
まさるえし殿へまさし雅のようにいなとを歌も
もうし夢やもえをいのなるん世ありうとおもし
はくきくふ時分のふしもさうしうおふく女房
なふへしいうしうも積まとうきふ雪ち那といふを
やつを竹へふたくうれおもわのさるもちはるうら濡し
ふうらうのさうひしきもいふ方なくうまし
うまい世まは雪消なんと思ひはく思ひれ分のよ
なきうかとふる例のまゝゆうちしかは御てうは

めしてそらにひとりふうけんさる火おこし出て焼火
さけきやうは中納言此君中将のきこえなとおほえん
ちやうく御物語義の独孫はよりわたらせしうわ
ほらぬ表のうへのなかくてもいかでよく思ひとしは
へうわかるる世わたりのなくもうしつつひとたびわかと
うちなりゆめ路我さへうち捨てはさかの人々のいとどく
なげきわびんず此名かいでおしつなへきなとあん
わすれし餘に思ひやりうちをそなひつつ館なと
よそ路へ里はあさをよ後しうおもりん事にて
かふ添と申なましきせまして細のさうしんなさき
あへぬこのそのされりの普みなる人々のんちはぬ

きは思ひさこそ道とし此世ありつきてはあはれは思ひよへき
すおさくく留まりうたりなりむかよはむまじきなりかり
み人よりもあとふくちおしき契りもなきまするうなど
思ふ事たえは世はかりなくうきなきにてはへて佛
のとは後まできたまへ添方な添遊しそれをさ井て
しらぬかずありなりぬる道いはいかなるのうち
まさすらよはのしさすうのとちめをみはやかあり
すくせのなともちはじめのかなのきこえもおぼつかなく
みえてしう後やすきかいまなん露後のかたさうなく
なかりうふ添をうしかれかくてわかしよりわかるよ
めなれは人ぞのいはいとてゆきまつりまんかとこう

ゆきの一義ハ此人みてまいらせぬへけれとたうのあし
わろうわきゞふんの給ふにそて御めなしのこひ
おくし給ふきの記れは庭にてうかゞひ法蔵をゑんをは
人こまして聞きとめんうるなしさそうち摘てま
まわるんのうれりし義をのくうち出まほし
けまいとさも空へともせおへわてやうたぬうくのこ
なくおおうし給へ深淵うのなりめくるし給へふ
夕着なとのえあやうな深わくいうれをし
なへてよはおわりたくさうわし人々をおおまんへちう
くそうやうの御物語にと志給ふ中将乃君とて
さふらぬはまうちいはくよわみ給ひにわしといせ

思ひはしみ給ひすくさいはやおわりんいとにふかう
いさき事に思てまいらせ心しさわるはをのくうを
給てはいそれのうこゆはあうは人をわことを給う
忠義物にんとしめおわりしたるし物哉とおわり出る
りつきてうれは所思乃すちなうまとおわりたる
心あきのうさちなともめやはくてうかひまはに出て
たるけりひたてなりきしよわいらうくしとおも
なれうと天人中はさうよえて給そは上達部なとも
むほまし義みはたうのう此事さちなとたえ有きわ
給へまいとくあれめんし給ふおきくうし人有
むかいんなとまゐるハはうしく思ふ淳め心おき

めんと思ふとも月はりかなくなとうりん男の有様
うらくるしきひとことをしのてすゑのよれ人よ
もてなやみまんなの名さんへうくてきへし思ほまて
なん人かも見てさなは心らいはまんかおほし事
なまとなを書りきてて思ふ事乃つくはなる
よわもえく候しおもとのめふやるいこよなくきてハ
まさわておこなわせおかをは大将乃君ことにさま
みをへたてヽう対面し給ひなふうく志須のいわ
志給へ候座うり人のいひつさゆへきこ給をひ給
たま思のとめてこうりさまんしすくし給ひはく
うな世をもえうせき座わ給りしを帰うらくうり

御帰りかもうきかのめまな給ふかく御座ては見いまもきさき
りこな御所の侍めのこふかわきまさまいとわかなくて
いはりこかも見法のなきさきま心でらし給まほいの
后いうちかきんりし世給てこの后をうらうくさき
帰なくさめまはおりしまさをたまのひきなは乃
の給ひまうはとそたりのおまへ乃枕様とかわ義て
うしろこわわき給へ候をいと老とえたそまはわ給
春さくさきかなまはは花乃木ともれさうわよな候も
まうふしきも木すゑおりしう霞みわたる候ふかうれ
御代のこうちいよ常なれぬなかやりかなまな出し達は
うち出ても給んも

うゑてこし花はあはしもなき宿にさへかゝるまじきを
にもきぬに袖とり捨て小業あはれの名残香にかゝく
りまゝにたまへれ有様いうしへなりかえるぬを
めて猶にかくしにはかゝ猶とまた心なくかなしうに
つきてもむまいくうたかさはまた大うこその世は
かのやうりある乃音も残こさるむ山のすゑ奈
しう乃をゆとく成まさわ残に山ゆきれとのくち
よけるさゝみてまたに心もうちにきよ露けくのみ
見れ須またかれにかの花は一重ちわては風さく〳〵
桜さうはすきてうには桜はひとけ花はなくれていはは
はかなとあうはむかしはとうれ哉そくとまた花のなを

よくわきてさくをはくしうへ桜さ猶しうは時哉
またまた有ひみちにはりその言ま須の桜ハ開よ
くわいうそひさしくちかし木はめくわに木瓶を
たてくかさひにたはきすは風わえ吹よかし比ゝ
しこう思えたわと思ての猶義のゆとうはらし
きゝもうちゑまれ猶ぬれ本に討の袖りとめるん人
まわいいはしうれかしもわ猶へるりしなと云
宿もうわなそまでありひにえまわ猶に糸りなと
きこえん事も猶わすくなしや気とゆへ猶ゆへ
ちりしまはらふへくとも對面いえあしらう
とて例乃夜くゑ妙へまたいはぬ知しとわかして

まくれの我ひし事をまうくしりの我にふとて
かしめにふかて法の袖をひろゆさくわなとし
はくゆまうりしおはさうひすんのまゐおかうらんよ
なりしかうまておさらへの座敷もみきのうち我もなん
わりしてなりめ我女房なともの御のこえの也
うへぬもあわきのいろあひみるもあやなしうか
やうゆはあらひ君はうしの法をなしもさはよれ
つきふれときてさうふやはしてむもん我をまわれ
さはらひなともいさなをうのふさとうあそさひし
く物らをなりくまこめやうよなさは
とはとてあしやえてうんふ善人の心とつめし

香の垣我人座かならはりかしゝうおかさふいとく
つましくなまはの道の法のりこふわりわをふよ
わりの定も人ありいうれておりましてさふさの
未来とふしゝまわうひ花おしゝ思我心ゑへともふり
かゝきいはけなし意い仏のおまへふそ證なうまえ
我きはなまゝわふうふありしとまふ法な心ふも
あさましうとさのすふうゝめしく法心こさ備く
するもおはきひのとやう我るましありまの養ほふく
なこなひ我てひとかいこふ思をふれ我へふもいやし
うゝやましかくあさへ我へ備女乃法んさうしよふふ
なくれぬるすとくちおしうおか法ふおりの花は

つれ〳〵としていと面白くこゝろゆきは来りけるよせ
たゞ一人もなくて花のいろはさましくのこりぬ
さぬきとほとけは流りうわうてこうへりわけきと
の頭そあれのまん乃屋まやきまちう浮世りみえぬ
花はなまなきやさのおほきさなとよしふたゝり
ふとい金きてうわ来る花すやあらむ花やうしにき
はゝしきかくはいと面白きもはかなんあわかかの
うへ一人なき事ともこつきこぶかにそつとうわも
白ひうさ徳ここ義に侍きとの頭はいうへり
皆には来もとなきこ頭もなく世之頭せきとしも
ようほとこ頭うしくかとながさるゝにつきてもしは

あやうのうれき事に清きてもう此きとのさう
てもあわれんりしと思ふなうぬかしなくても
やえんかしうなといゝけふうわしかとうわ此御
はわはまといそなる事うやはわしとおほし
出ふにまほう此おわう世くしう白ひ和ほうわ
し心さまもそなしこゝ頭ふのゝ思つくけるま
頭ふうりまちの流のも頭さほ婦とちかま出めふも
いかにも命しみ嘗此あるとくしうおりしき経
ふれ屋うそほりしの流方にわてわ頭へるゝ久しう
さうしものうき頭りぬにおわくながきおわなまはうち
おもひ頭するまとさまよう瑩ひきう頭にゆくまで

はなれて後こそ人の心はまさりまさるとも見え侍れ　はなれては
みかうちはまよはわすれてこそゆくへよりなをもとめてみし
侍べかりしもおかしくかへらるゝにもおもわけに
こひしうおぼしさのみ悔さまさりゆくにしもなく
さむへきんなとはいとくるへる病しうこなさるそれは
のと医者に昔物語などし侍人をあはまさとんとう
めんはいかもまゐりはべべき事とゐすし人よりわおも
かえそけんてけりなまゐりてこにこの世にしうと
ましはべきるまくとこ侍つきひをさしよ大かたの
世につれそおのゆくはてにそいまぬへきわしけは
まひなとむくさ候かうはまよ思めくらし来り給

我もみつゝら捨ばへて野山の末にてかゝりかえむよ
うと給ふるさりわあ侍まじうなん思ひゐし我すみの
世ありとはなきわのあとちのきさめにしてもあは
まし事なしおなふしつゝひそいましてすぐし
てき侍りこ侍よりうりとうしきすなとさして
一すちのなりさまのとはの侍え侍とおかしうゝ
さまりかことりるとありんかましきをいとおしうえ
まわて大かたの人めにかまうわおしけなき人
なま心の内れかうしたのはかれなふ侍るなるを
ましていかそのはちゝ侍やすくもおかしけてん
さやうにあさへ侍あとはかくわてゐるくしき

かくしさなどもなちむでてなかりくなる事なと
侍るを御覧じ候へとよ宮きやうに侍らんやまゐる
つれにみえそさうを給ふさふらう侍らむと思召
まゐ侍りてこうりもしん乃たなし事と存候ばかり
侍ても心にかと候へ思ふまかうぬふしわかて
世をいとふ身てりなふとてかれいなく候わ候よ
事せとうな成へうしおやしのとめぐを給て云
うちふともおとなひさをたまひ候しとりうこき
なりゆくへ御前を御覧になりて給たまひんまては
みてまふく侍るむ出る心入はくものりくも侍ふ
道じまかといとおとなひて来ことふくしきいかで

めやすしさまて世のとめんんにかさきうあさきまま
をとかぬへけまなと乃給て着まわりのを思ふにと
なとうふるをお給中に故実らいの宮乃りくま給へを
しらけん心のいろなそても更ふよに心あらいつか
覚えしうまん大りこの世よつきておもしりか
は世有様をおさなくまかえまわさえそさふ候とちめの
られしさも人よわかよおもにしなれみはうり
とわかくれうしふしも物れ気はよりぬかさせとし
道ぬる人になくれてんねきめんりさなく忘れうく
きもたくう候中のみしさのみよはありまよおさ
あ出きあわおふしそしあわ候まも給とまに

花のちるすゑ乃世よりまち待られてけりの方も人の方も
思ほしき程をるにかなしさのみかへりさりけりなん
すべて物れ哀もゆくあはれさを詠もおかしきほちも
ひろう思めくらすりくしくちふるすり乃あさうしき
なほ小なんありけるなど秋ふくはまて昔今乃清
物語小かくてもほりしは八雲夜をとおかしなりける
うへわ語を女も物花よ思ふへしまの清んゆもあや
しくも歳よくるうなとおかし志つくはさてあまりさ
例の清をこ家ひよ秋中小歳てうひるのおまへしに
いでものをうあよまわふし語清とめて清文書わ語よ
なくしく帰をうしうれかわ乃世をいほくも

つ年のとこよありぬりけんれ清ほわさ後かいうう
めしきなわしいといとうくあるぬさ後よおかし
ほまたる清気色の長う後房しさるよ方のといさし
全年きて後く後れ語ふ

うわのぬし萬代れみたえしまわうほるまし

花のうけ我ふふみをふわうるうすあはれの衰の清まよ
小もなまめさましきものふおかしたるうをほ悪乃
世小はうこ見んよんたき我見しほとちかそうし後
座は昔うる山はうちふ見むへく思のりし語なうる
まうさわとそひさ小家小ありうちとけきゆへ有て
もそ前し語人るとしん全まて我人いさしもみまつる

さわきりしなとおもへりいとせめてさうくしきさ
時ハうやうふたく大うさようちうのめきさ給ふ折々も
あわ昔の法有様ふは名おかくれたくるへし夜乃法
うさよわ法衣の色の法架裟をまわ給ふとて
夜衣をちうんてかるゝふちうわゆるき思ひも
まこみやいきぬ法西し
羽衣のうれまようはふかふよわハ雲始れ世う
いゑくうなしき紫れ日いとつまくめて春ふハ物
見ふとて人てんちよけなうんかしとて見や志枝れ
はわき枝なとおもひ座佛世房等といりのふ法うく
しかゝむ果よ思ひて出みよりしなとおほ給中将の

慕のんかし　おもてありうたく孫きこさ節をおゆかん
おりしてみ給へまたいとさてやりよ於りしき法ま
しておきあのとたわはすつきうれ座のあり白ひ
うふおおもてかくしてはしふくたとて節おかれ
おりまなといとおりしけ也能れ義ハ見たるけさひ
さはけり枝くまんさうい給のひとへいとこ義ゆひ
きよをなきなとうおりしう近うきなわてもうう
きぬもぬ義ハへしうわかるをとうくひぬりけなと
はるふわふひを承らうよ亜うわ彩るをとわ給ひ
ていうよ纪うやちの名はうこ歳連ふけまで紀の給へは
さうもこうハようへの名ありえ草のめくふの

かさしよなさんまにいるゝかゝりちらひて遠き雨
くもといとおかしくて
大かたは思ひはてゝし世なれどもあふひは
なほ庭つみをそのほとりなとひとりえつわえおれり
あらかたぬくしきなわ五月雨はいかゝなりめくらし
路すわかのうつろふくさうくさゝきに午ちる日乃月
うかへるにさし出たる雲間のめつらしきに大ぬの
君おまへにさふらひ紫式部乃月影にいてきたはや
うかこ田ふかみのに返風なほり[illegible]れる世ぞなる
きはあらもさなんとまうる時おとに織小たち出る
むら雲のくしきいとあやにくにそおもしろくきり

ふりくる雨よりひてはとは風にとうろも小筆をのと
えしてなくさきんちひるにまとをうはきおほかと
めつらしきぬにある事をうちすしろへるもおわ
まうまやいもか恒孫よそとなはせ路かしきたゝ点
ふわひとわさるんはしたるはなうにふくれとあや
しうさうくしくうさけまちか武山住さん
かもうくて方をなりしさもんはうよなうき路
すとぬへとよりさ氏かなとれ路て女房たちへくさ
りのふとまいうきよおとこともめさんまあさく
しうきかとなわちとの路んよはしめてとなりめ路
随気きのはなを以心くるしけまはなりくのみおもり

風きよりハはなことひかもはんにはまし給りんすり
かこくやとみえまわ給ふのうようし佗西教なま忘れ
かうまうしてたとりわうしと思ぬ給へわ哉白
かふと思給ふる猶よほそもやうくちうなわ
侍よかわいうやうみかの教きておわしめけるんとや
給へはなまちうわ世のつゐなかうぬ事とうふわの
きんうみ心きうしをうれたる極楽の菩提なとうみ
うひなれ供養すへ来種なともはまうこ有きゆゑなる
うし教うはせんなそみれんくハしうう教きたなまハ
まうくうんてけんきうりせか修業のいりん小きて
うひてなんもみすへきなとの給かやうのうとも

りとまわとわたてゝおわしときそなゆハうし後や
すきわきなまとこみ世かはかわ初乃侍ちまわなわ
なわとみえ給ふかはうこえいふはうわとゝめ哉こし
給へ徳人ハふかもみ志給りぬ志うくちゝわしう侍わ
けまとや たまの人ハなれハうわそめなゝは京なのまさ
人くかもさやうなるきことの大りこすくなうわ悲ゆ
男はうるのくちわしさかこう教きなこうハりとは
ひろけ然りあなとの給なまきとよつ巻ても志みひ
なこきかしき後よハきみはゝましくそ道うしこと
いうつうその給ひ出ぬりまうまはる時なるみ神の
うふ御悩たるもいのふきわてゝのとや人たゝなかゝは

なき人をまつのふ宵のむつありぬまでや来
ける山にとこそいへとていかゝ色をなりのめ給ふ大将
時あるきこえけりはてゆむ故にのさかふちもは
とうさりわと女房なとおほくいひあはめたまふかる
やくめは大将の君ハ座りて清との井にさふくひ
給ふひしまき清ひとり孫の御くはしくまて時く
お座りよさふくひ給ふをおはをしよはいとけとを
ふわしおましけはたわのいまうもうちえなまぬ
なとろりはきて思ひ経るすとも於にうわいと
あはきはすし其つゝみてなりめ給ふに泥け蓮の
さうわあるを見給ふにいまふにおかりのはなと見おかし

出くはまつくしくてはくく出おはいる経に
月も當ふくわ白くゝしのあうきか座りなはり
於おけなそしこの夕をんをひとわのゝ見給ふ
ハくよううひふうわきは
はくくやうわのなまくらす夜の月をかうこと
かましき出の経うな出のいつとおかすとひちりふ
も夕顔にかふるとんてと例のふはあともかゝは
すちふのえくちなまつ於へ里
其はをまるかふは哉んそもうふしきハ時う
ともなき思なわくわ七月七日ゆ例にかりわたる
事おやく清あさひなともまつ給ひはまつくり

なかめくらし給て星合の空人もなかしまのゝ秋
ふかう一とせ給ひき升給ひて妻戸をしはし開給人
はよ前栽の露いとしけくわたとのゝ戸よりわたるを
見てみわたさせ給ひていて給て
七夕のあふせは雲のよそにしてわかれの
庭に露の置そふ凡此書さんたゝならぬ所は
しも御一法事のいとなみそてはいさちゝ給ハ
まきらはしけなりわいまして西にくる月日よと
おかれにも御義まそわりくらし給ふ清正白
にはかなしも此人てみなにいもぬしてかれ此暑随雁
なとゝふり供養さるを給ふ例乃宵此清なさこなひけり

院まゐりまいらせる中将の君乃扇に
君こふる涙はきはもなき物をさふなれかよの
まてとかふらんとのきつ書と依なとのて見給ひて
人こふるわか身も末に成ゆけとおわれなこの依
涙なりわたとのきうへ給ふ九月り成て九日いさ
おかひさる菊を御覧して
もろともにおきゐし菊の白露もひとり
たもとにかゝる秋の朝顔世月は大りとさもしくま
りたる依けいやゝなりめ給ひて夕暮の空乃気色
なとも見もいけ給ひてふるわたしのとく
ひとりこちおなせ雲ゐをわかれ依るはつらふそしる

やましく悔しき道路ふ
大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ玉の
ゆくゑたづねよとなくなくりよはきてもまさきのの
月日ふうへておかさほ血涙をとゞひて世中にこ
ちのとなく悔めしけるき流大将殿は思ふら
殿上し給て宗の路へつまれなしやとまて上つまと
いとうけくしきこま也ゆおちの路中将誰人か給
なとをえんそあ我はわのきうきとあきまくもあや
すくてやみふうちつくきまそうしつきばくあ流れふ
宗わ路ふ思ふすみけあるさ悔とも思ふ路ふり
ゆすしんあやしーわし白のけはおわかさはうる

おりし出る流庵し
若人ハとよ比わのわりいうくくふ日のけも
志うてくうし流る我らとしーなりのくて志のひ
ゆくしほ道ハと我や世我さも路ふへきなを特のく
おりしまうくほり哀なほりつきをゆやしく
さはへきすりとも流んのうきり。おりしはく来て
さふる女人てあもあとくふ流きてもの路ひなと
おと流くくしくとなん給と志あし路りことちうふ
さふる女人てハ流かいとけ路ふへ来気さとえんある
まうくふとしの着りもく流ほうりふしまさまや
かさわなし旅とまゐてうさわなほへまゐ人の法文

ともやまハおしとおほしまゝ人にやむごとなく
のこし給ひしをものゝつゐてにて涙ぐみ給ふ
つきて座りせ給ひなとひとくにうつのさ候はゝ給ほひ
おこまかなる給ひきはしあはれなりけるはまなふかい
ことにゆひはかきてつむねきはうたてかりさきあはれ給ひ
くはりなきとひさしう成りくは世のこと
おかしけりたくいはの座りあるすくにあはれとける
そとせ乃形みにさ岸へりわくはをこれなかわぬハ哀
よにおかをはりひさくてうとうぬ人こ三人
はわれそへもそ座りを給はぬうしらぬ種の事
にて一すさゝ世にし人れ給ぬ心ハ宍あるまして

いとゞうきくるしきかれともみれはあまりぬまてあはれ
おはしける清盛乃みくさきになりれたりとを人もおほせされん
ようしとみえ吉ほへ哀の子そけるいさつうさし大なる
けまはをし座わ給て
さての山路うし人をきふふとて給をみれは侍くも
なく涙とふの隣にやうつぬ人くもものかたりいえひとお
ひたけ給ひとられとあのくみゆるか心涙ともひとも
をはうなくは世なうるをうぬ御おのおとを
はかしとおもふ人ほまうくよかいは給へは玉の恋くる
そのおわりのわらも哀あんぬかなしさやらんうる
あしいとうそいゑ一きたの清盛とひもあへ

しく人わろく成ぬへくまさハよくよみ給まてもちまほ
座すなりときゝ給へはうこりうに、
きゝはめてめつるものひあし藻しか草おかし
雲の嬬とをなむとのおつきさせ給てめかきやう座りを
給はは仏名もことしもたちわかさうえともけさは
まや光ともこととの楊枝此と思くなとはれれふ
おかさなりすなかきりをとひ孫りつも佛の
きて給りんすこりいさし雪いさうかわて
まあ座すなり積まなりくれ導師此まりけるを
おきみへりめしてさうつきなとつゝの作法よわも
さしふすを給てことよ候くなと給ひは筭ち給

久く案わおはやきゆも仕て院よもはらんし念き
うはは導師此うし程ハやうくいろのはゆそ
さふろふも志よ覚さ給例の宮達よ上達部なとあまる
案わ給へるを持は左のとは給はる気色はかりしめて雪
ふまてりやされさは程おもしきとは遊ひの有となき
ぬ亜けまとおあとしきすてハもの孫ももをひぬ
へきんちこ給へは時よまわさる物おすしなと許す
をさ心給母ことや導師のさうつきのつ年て小
去まての宗もきつ雪のまち有色はく梅を
りふりうしてんはりんへし
子世の喜んふへ嘉花とおるをさきて我身老露と

ともにかはぬる人々におかくまえをきたまひともらし
はる日る出給へばりうこち昔の清光にもみおかす
うひて出雛くめてたくみえ給をこれにかはぬるよう
ひの僧ハはひなり滋も出てめてわかれ年暮ぬと
おかれも心ありきまわりの宮のなやらりんよ音たり
うはへおるすばわき嵐をきせむとりしまあわき孫も
おりし鶯の音頼をみさらんすと昔よ思ひりうし
物思ふとはく月日も知ぬまゝとしも我世を
くふやはぬぬぶはいうちの種これすつゞよわこと
なみへくとをきてうを孫にひぐと達大人の浅ひなて
物思ふ多くの縁故なとよなりおかしきうりくてとう